

川の流れば 今日も絶える ことがない

人はいつから川に背を向けた

川はずっと身近にあるものだったけれど、それはいつのまにか視界の外を流れていた。世の中のリズムが少しだけ落ち着いたいま、体の奥底から不思議な欲求がわき上がる。川の色が恋しくなる。

川を再生するプロジェクトの意味
 すでに「リはんシティオ那珂川」の川岸には、1,000人が集える木製の親水ステージ「リバーフロントプレイス」をはじめ、自然石と水生植物を配した多自然型護岸、既存樹木を保全した芝生広場、桜並木が美しい河畔のプロムナード、魚道を備えた堰など、従来にはない環境への配慮が随所に施されている。窓から眺める太陽が水面できらめく朝、川沿いの散歩道をそよ風が吹き抜ける夕刻。水はそこにあるだけで、人々の暮らしに潤いを与える。とりわけ、気ぜわしい都市の住人にとって、まちを貫く一本の川の持つ意味は想像以上に大きいと思われる。



那珂川の水を巡る歴史と産業
 那珂川でかつて漁業が行われていたと聞いて、にわかには信じる人は少ないだろう。いまは喧噪のまちなかを流れるこの川も、昔はアユ、ハヤ、コイ、フナ、ウナギ、ナマスといった淡水魚を狙う漁師が船を操っていたのである。そもそも那珂川と流域の人々の関わりは深く、長い。多くの川がそうであるように、道路が発達するまでの那珂川は交通の要であり、飲料水や農業用かんがい用水など、生活の糧を与え、暮らしの動脈的存在であった。国学者の貝原益軒が著した『筑前国続風土記』には、日本最古といわれる「二の井堰（現那珂川町）」の記述がある。また、博多や摂津の住吉大社は那珂川町に現存する現人神社の祭神である住吉三神からの分霊とも伝えられている。

近年になってからは、地下水を含む那珂川の豊富な水はむしろ工業用水としての比重が高まった。日本有数の大型製紙工場やビール工場などが美野島・清水地区で相次いで操業を開始したが、いずれも上質の水をふんだんに必要とする業種であった。その後、長きにわたって福岡の発展を支えてきた同地区にも、新たな時代の波が押し寄せる。近年の産業構造の転換に伴って一部工場の移転が始まり、その広大な跡地の有効利用が懸案として浮上してきた。「リはんシティオ那珂川」プロジェクトは、この都市構造の変化を好機と捉え、都心に近い次世代型の都市型住宅の開発と、河川空間を積極的に生かした快適な住環境を総合的に再生する計画である。



昭和40年前後の那珂川



リバーフロントプレイス